
お・り・が・み 虹色の伝え手

石坂金代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おり・が・み 虹色の伝え手

【ZPDF】

Z7663U

【作者名】

石坂金代

【あらすじ】

俺は転生した。転生した先は林トモアキワールドだった・・・って、ここチートキャラ多過ぎなんんですけど！？　マスラヲしか知らない主人公が、おりがみを原作ブレイクしないようにしてマスラヲまで頑張るお話です。

プロローグ（前書き）

初めての執筆なので、応援よろしくお願ひいたします。

プロローグ

「おいやヤメ、沙穂さほが何処なに行つたか知らないか？ 先ほどから姿が見えないのだが」

自室じしつでくつろいでいると、一人の青年が入ってきた。細身にまとったのは開け放した黒いジャケットとスラックス。裾すそを出した白いカツティングシャツ。銀縁の角メガネの奥には、切れ長の鋭い目つき。

この青年の名は伊織貴瀬いおりたかせ。このデイズ・ーランドの半分ほどの広大な敷地を持つ屋敷の主であり、現在の自分の雇用主である。

「沙穂ちゃん？ 僕は特に見てないぞ。何か用事か？」

「ああ、今から名護屋川鈴蘭なごやがわすずらんを迎えに行く予定でな。沙穂にも同行してもらおうと思つていたんだが」

『名護屋川鈴蘭』

その名前を聞くと、やはりここは『お・り・が・み』や『戦闘城塞マスラフ』の世界なんだと再認識させられる。

「そうか……いよいよか」

そう、おそらく原作が始まろうとしている。気が遠くなるような長い時間を経てついにこの時が訪れた。初めてここが物語の世界だと認識したのは、俺が転生してしばらくたつてからだった。

転生する際、俺は神様から間違つて殺したお詫びだと言われて、所謂チート能力というのをもらつていた。

よくアニメの主人公の技や武器、たとえば『無限の剣製』だと、『王の財宝』だとをもつて、俺TUEEEE!!をする転生者が多いと聞かされていたんだが、俺はそんなことより平和に暮らしかつた。

だから『どんなことがあっても怪我や病気をしない頑丈な体』と『どんな物からも逃げ切れるだけの速さ』、『金運』の三つをもらつた。

「何か言つたか？」

貴瀬がこちらに声をかけてくるが、何でもないと答え溜息をつく。

そう、そこまでは何も問題なかつた。しかしここからが問題だ。のんびりとした平和な暮らしを望んでいた俺は、あろうことかこんな危険な世界へ転生してしまつた。原因は俺の選んだ能力だつた。

考えても見て欲しい。

『どんなことがあっても怪我や病気をしない頑丈な体』と『どんな物からも逃げ切れるだけの速さ』、『金運』は普通の人間には到底無理な能力である。

だから俺は魔人として生まれた。もう何年前になるかはわからな

いが遙か昔、まだこの世が魔王制になる前のことだ。

生まれた当初は愕然としたものだ。何せ俺の背中からは人間にはありえないものが生えていた。白い翼だ。

それからしばらくの間（といつても人間では考えられないほど長い間だが）俺は神からもられた素早さと翼で、俺が生まれた所の主の奥さん、その使いパシリをやらされていた。それに嫌気がさして逃げてきた時に、出会った人物がみーこだつたのがわかつた時に、ようやくここが林トモアキワールドだと知った。

まあ、それからいろいろあつたがここでは割愛をさせてもらひ。

「では沙穂に『伝えて』くれないか。玄関で待つているからすぐこ来いと」

「りょーかい」

そういうて俺は神器『ケリュケイオン』を取り出し。沙穂にメッセージを伝える。

「・・・あー、『沙穂ちゃん？ なんか貴瀬が出かけるから付いて来てほしこうて。・・・うん、玄関で待つてるらしこう。・・・はいはい、じゃあねー』」

どうやら沙穂は森の中にいたらしい。ていうかこんなことにケリュケイオン使わせるな。携帯持たせろ。・・・まあ沙穂が携帯を使うところなんて想像できないけど。

「今から行くつてさ」

「そりゃ、出は僕も行つてくれる。君は新入社員のためのメイド服を用意しておけ、ククク・・・」

「うわー、悪そな笑み。さすが悪の組織。ただのメイドバカなだけかも知れんが。

「てか、そんな急に言われても用意できないぞ? 僕の予備ならあるけど・・・」

言葉通り俺は今メイド服を着ている。転生する前は男だったが、今は女になつてしまつてしているのだ。最初はかなり焦つたけど、今じやそれほど違和感もなく生活してる。喋り方が男っぽいのはそのせいだ。

「それで構わん、彼女の背格好は君と同じくらいだ。サイズ的には何の問題もないだろ?」

「了解した。まあまくやつてこいよ」

「ククク、君に言われるまでもない。では行つてくれるといよ?」

「そう言つて貴瀬は部屋から出でていぐ。

「・・・よし、じゃあ俺も準備するか

ちなみに俺はマスラワは何回も読むほど大好きだったが、おりがみの方は読んだことがなかった。だから、俺はこれから何が起きた知らない。

だからどうあえずの田標はあんまり原作ブレイクしないよつこ
て、マスラヲ世界までたどり着くことだ。

・・・もうすでに原作ブレイクしてるなんていとはないよな?

プロローグ（後書き）

とうあえずプロローグ終了。

次回は、まだ心がきれいだった聖魔王閣下が出できます。

不幸少女

side・三人称

吾川鈴蘭は不幸な少女だ。

生まれたばかりの彼女は、生みの親に孤児院に捨てられた。

しばらくたつて里親に引き取られたが、後に義父が事業に失敗してしまい酒におぼれて離婚し、その後義母について行つたが、その義母も鈴蘭が中学生になると新しい男を作り、何処かへ行つてしまつた。

そしてしばらくは義母の親類縁者のところをたらい回しにされ、そのせいで転校が多く、中学生時代はまともに友達もできなかつた。

ようやく名乗りってきた、生みの親の兄弟だと言つ男は借金を鈴蘭に押しつけて夜逃げした。つまりただの詐欺師だつた。

（もう誰も・・・誰も信じるもんか・・・！）

アパートに帰ってきた鈴蘭に残されていたのはわずかな家具と、二千万という途方もない額が書かれた借金の証文だけだつた。

静かすぎるのが嫌でつけたテレビの中では、今日も『神殿教会』の司教であるフェリオール司教が映つている。

白地に金糸の入つた衣装、銀灰色の髪、色白で細面の・・・清廉

を現したようなその姿は、女子中高生のアイドルになつてゐるのも頷ける。

そしてその背後にはライトアップされた白亜の建物
神殿が建つていた。

『信じていただきたいのです・・・』

若き司教のその声だけが、テレビの前で泣いている鈴蘭の耳に木
靈した。

『つまり、現実に・・・観念的なものでなく本物の神が降臨すると・
・・フェリオール司教はそうおっしゃつてゐるのですね?』

インタビュアー興奮した声とともにカメラが教会の上空を映し出
すと、そこには青白いもやがかかっていた。オーロラか、虹か、そ
の青い色だけを取り出して滲ませた様な、まさしく神秘的な色だ。

ヘブンズゲート・・・神がぐぐると言われてゐる扉だ。科学では
説明のつかないそれこそが、一年ほど前に突然現れた彼ら、神殿教
会が単なる新興宗教に留まらない一端であつた。

『はい。預言者様の御神託によりますと、残すところ一週間と』

『では・・・一週間後にあるそこから神が?』

『ええ、一週間後です・・・ですがそのためにはある人物の祈りが
不可欠なのです。今夜こうして放送させていただいているのは、その
人物の心当たりを尋ねたいからなのです』

『その人物、とは?』

インタビュアーが息を呑み、マイクをフェリオールの元へ寄せる。

『鈴蘭といふ名の少女です』

画面の中の若き回教と曰が合い、鈴蘭は総毛だった。

『名護屋川鈴蘭といふ名の少女です』

しばらく沈黙が続く。

司教の目が逸れ、鈴蘭は脱力した。鈴蘭は鈴蘭でも、彼女は吾川鈴蘭であった。過去に名護屋川なんて姓を名乗ったこともない。

『それだけ・・・でしょつか?』

『私どもの得た手がかりはそれだけです。ですが信じれば、きっと主はあなた前に』

『どうでもいいことだつた。』

神がいるなら。救えるものなら今この私を救つてほしい。でも救われなんてしない。明日からどうやって過ごせばいいかもわからないこんな時に、鈴蘭は神なんか信じじることができなかつた。

（死のうかな・・・）

そんな考えが際限なく浮かんでは消える。

その時ドアを乱暴にノックする音が耳にはいった。

ドアを開けた鈴蘭が何か言つ暇もなく、ガラの悪い男が一入土足で踏み込んでくる。そのうち派手なスース姿の男が横柄に命令した。

「よつし、金田のもん全部運びだせ」

「へい兄貴」

そしてヤンキーに毛の生えたようなジャージ姿の青年が、家財を一つ、また一つと持ち去つて行く。

しばらぐのあいだそれいづくぬけひの時計は十一時を回つた。

「あらかた片付いたな・・・で、いくうになつた?」

「へい、五万とんで百と五百だよつです」

「ぶつー。」

鈴蘭は思わず噴き出した。あまりにも安くて。

やつしてギロツ、と兄貴と呼ばれていた男が鈴蘭の方へ向く。

「せうこつわけでねえ、お譲ちゃん。一千万には全然足んねえんだわ」

「ひつ・・・・・！」

ぽん、と肩に置かれた手に鈴蘭は身をすくめた。こうこう時の相場くらい鈴蘭だって知っていた。

「悪いけど、身体売つてくれねえかなあ？腎臓とか二つある奴から頼むわあ」

（うわあ・・・・・きなりばら売りですか・・・・）

そうして鈴蘭が絶望しかけた時、

「どがあつー！」

突然ドアが吹き飛び、弟分を下敷きにした。

「な、なんだあ、いつたい！」

「そこまでだ、チンピラ！」

見るとそこには銀縁メガネの青年

伊織貴瀬がドアを踏みつけ部屋の中に入つてくる。

その後ろから、鈴蘭と同じ年頃の、メイド服で癖つ毛の少女が入つてくる。その手には日本刀を持ち右耳にはバンダナを巻いている。

「な、何なんですかあなたたちーーー？」

鈴蘭はいきなり現れてドアを破壊した一人を前にしてパニックになつている。

「ん？僕か？僕はこいつらの者だ」

貴瀬が鈴蘭に名刺を渡す。とりあえずそこに書いてある「ひとて」を通した。

「え・・・と、『伊織魔殺商会』会長兼企画兼経理兼広報兼営業 伊織貴瀬』・・・？ 何ですかこれ？」

それを聞いた兄貴は田をしばしばさせている。

「ま・・・わつ、商合・・・・？ それが何だつてんだ！ ああぐふえー？」

兄貴が言い終ると同時に、貴瀬が顔にストレートを一発。そのままにやにやと笑いながら自分の正体を告げる。

「悪の組織だ」

不幸少女（後書き）

主人公が一話目にしてでてこないと……！？

次話も主人公は最初だけかなー

悪の組織と借金

鈴蘭に着せる予定のメイド服を用意するために歩いていると、前方を小さな女の子が一いち方に背を向けてくと歩いているのを見した。

「おーい、リップルラップルー」

俺が呼びかけると立ち止まって「ひらり」を向き、無表情ながら愛らしい瞳をぱちくりとさせている。その髪は青みがかかったような黒髪で、とてもかわいらしい。

（やばい・・・、抱きしめたい・・・）

少し邪な感情が浮かぶがそれをすぐに打ち消す。

「何か用なの」

「いや、別にこれと言つて用事は・・・・あ、そういうば貴瀬が鈴蘭迎えに行つたの聞いた？」

「へへへへ

「聞いたの。でも、これといった感想はないの」

「まあ、おまえだつたらそつぱつと思つたけどさ。もつひとつと興味示そづざ？ 仮にも魔王候補なんだしさあ」

「そんなことで搖りぐ、わたしではないの」

やれやれ、と首を振りまた歩き出す。しかしその時見た横顔は無表情ながら、どこか楽しそうに見えた。

（（（最近暇だったからなあ・・・）

多分これから少しばは退屈を紛らわせただからであろう。

「それに、魔王候補といつても、ただのお飾りなの。そのことは、アヤメもよく知ってるはずなの」

そう言つてリップルラップルは地下の方へ行つた。多分、貴瀬に頼まれてたものを作つているのだらう。

「それもそつか・・・。さて貴瀬達は今頃ついたころかな？俺も準備しに行くか・・・」

○

悪の組織。

田の前にいるメガネの青年は確かにそつと言つた。

「つてええ・・・！ な、何だテメエ！ やるつてのかー？」

「もつやつたんだ、僕は

(な、何なのこの人！？)

鈴蘭の理解が及ばない間に、目の前では事態が続していく。

「野郎・・・おいテル！ 何時まで寝てやがる！ やつちまえ！」

「へ、へい！」

そう言つてドアを押しのけたチンピラは、腰の後ろから短刀の様な刃物を取り出す。しかしそれまで人を刺した事などないのか、すっかり腰が引けている。

それを見た貴瀬は薄く笑うと、

「くくっ・・・新品じゃないか。沙穂、少し見せてやれ

と、刀を持った少女に言つ。

しかし、沙穂と呼ばれた少女はぼーっとした様子で動く気配がない。それを見た貴瀬は困ったように指先で頭を搔いてから一喝した。

「軍曹つ！！」

その瞬間、少女はびっくりした猫みたく、パチッと眼を瞬かせる。

「得物のみ斬つてよし！」

「はつ！」

伊織のその声で少女の雰囲気は一変する。その顔に浮かぶのはなんだ狂氣。そして何時の間に抜かれたのか、少女の手にはチンピラのそれとは違う、禍々しく黒ずんだ刀が握られていた。

「了解であります、主さま」

少女がそう言つたときには、すでに短刀は根元から斬られていた。チンピラはそれを見て悲鳴を上げて去つていく。あんぐりと口を開けていた兄貴も我に返るなり、ベランダから飛び出してしまつた。

「ふん、下らん」

伊織がそう呴いたのを最後にあたりには静寂が戻つてきて、鈴蘭はへナへナと座り込む。どうやら腰が抜けたらしい。

「た、助かりました・・・あの、ありがとうございます・・・」

とりあえず今自分を助けてくれた少女の方へお礼を言つ。しかしその少女は刀身を揺らしながらこちらを見てソワソワしている。

「斬つてもいいですか？」

「へ？」

「斬つてもいいですか？」

（・・・「わい。この子やばつ・・・）

目が見るからに怪しい光を放つてゐる。しかし、

「もう終わりだ、沙穂」

伊織の一言で、少女は刀をしまい、しょんぼりと肩を落とす。それはそれでヤバいと鈴蘭は思うのだが。

そうして伊織は鈴蘭の方へ向く。

「君が吾川鈴蘭だな？」

「へ？」

「旧姓は深山・・・その前は木野、と。随分あちこちを転々としたようだな」

貴瀬の言つとおりだった。新しい親が出来るたびに名字が変わり、住む場所も変わつていた。

そんなことを思い出すと、また悔しくなつてくれる。でも、今は同時にこの青年が来たことによって何か運命が変わりそう、そんな予感もしている。

「あの、あなたは・・・？」

「君には借金があるな？」

「へ・・・？確かにあつますけど・・・」

「一十億ほど」

「あの、もう一度言つてもうれますか？」

「君には二十億円の借金がある」

・・・・・な、

鈴蘭の叫び声が深夜の住宅地へ響き渡った。

悪の組織と借金（後書き）

また主人公の出番が少ない・・・！

悪との契約

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ!

『一千万だと思っていた借金が、いつのまにか二十億円に増えている』

た

な… 何を言つてゐるのか わからぬーと思つが
おれも何をされたのかわからなかつた…

頭がどうにかなりそうだつた…

催眠術だと超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…

「つて、いやいや…！ ちょっと待つてください…？ 二十億つて
そんなことあるわけないじゃないですか！」

パニックになる鈴蘭。しかしそれを宥めるよつて貴瀬は懐から一枚の書類を取り出し鈴蘭の目の前に突き出した。

「これを見ろ」

書類には何やら細かい数字がざまあまに合算されていて、最後に
そのような桁数の数字があつた。

「『』の最初の親が事業に失敗したのが痛かったな

そこには里親の義父の名前があり、

「それに、その時の母親も、あとで結婚詐欺にあって大分借り入れたようだ」

里親の母の名前もある。

「それからだな・・・」

次々と読み上げられる借金の数々。里親の親類の・・・中には聞いたこともないような名前まであった。そしてとどめに、

「嘘・・・！？ 院長先生まで・・・」

最後の最後まで信じていた孤児院の院長先生の名前まであった。

「巣立つていつた孤児たちの苦労を放つておけなかつたそつだが

「

我が子同様の孤児たちの借金を一身に背負つた挙句、首が回らなくなつたらしい。

「・・・私もその孤児たちの一員なんんですけど・・・私の苦労は？」

「そんなことは知らん。つまりだ、そうした諸々の借金を芋づる式に一本化していくと君に辿りついたわけだが」

「でも・・・明らかに私と関係ない人とかいるんですけど？」

「知らん」

「知らないってそんな無茶苦」

「ひつ、と貴瀬は鈴蘭の眉間に小突く。

「つたあい・・・」

「それはこいつちのセリフだ。大体どうすればその年で億単位の借金が作れるんだ？ せっかく一本化した僕の都合はどうなる？ え？」

「ひつん。」

「も・・・」

「ひつん。」

「もういやああああああ！ 頭に来たんだから！ もう私は誰にも、何にもあげないんだ！ 誰も信じないんだ！ 死んでやる！」

そう言つて足元に落ちていた、沙穂の切り落とした刃物を首にあてる。

「みんなみんな私を馬鹿にしてつ！ 院長先生まで裏切つた！ もうたくさんだよ・・・私はつ・・・」

「まあ待て、もうわかった

やれやれ、とこいつに貴瀬は手を挙げる。

「確かに、無闇に一本化していつた僕も馬鹿だつたな。君のよつて無力な女の子に当たるとは予想外だつた」

実のところ貴瀬はわざと理由があつてそいつしたのだが。

「まあ君に選択肢をやつ。さすがに今すぐ金を払えとは言わん。泣いても始まらんぞ、とつあえず話を聞け」

「…………」

「一つ田はじの僕に仕えて二十億円分の働きをする」と「一つ田はじの場で爆死することだ」

「爆つ！？」

気がつくと、何時の間にやらナイフは奪われ、代わりに冷たい金属塊　手榴弾を渡された。ファイクションの世界でしか見たことがなかつたが、本物はその威力を語るよつて手のひらに重くのしかかってきた。

「誰にも何もあげたくないのだろう。これならきれいさつぱり、消えてなくなる。ピンを抜いてレバーを引く、それだけだぞ」

「つ…………」

「まあただしのボロアパートも巻き添えにするがな。住民も半分は死ぬだろつ」

「何を……言つてるんですか？　あなたは……？」

鈴蘭の目が驚愕で開かれる。

「何を気にする？ 君は今、天涯孤独だ。誰かに迷惑をかける心配もないだろ？」「…

それを見て貴瀬の目が光った。

「さあどうする？ 僕に仕えるか？ 否か？」

「…・・・・・どっちも嫌・・・って、言つたら？」

「悔しいから僕がこのアパートを爆破する。もちろん僕と沙穂が逃げたあとだが

やばい。この人はほんとこやばい。

目がギラギラしている。

「・・・・・そんなの無茶！」

「ひー

「無茶苦茶は君だ。二十億捨てるんだぞ僕は。命がけで僕を楽しませろ。当然だろ？」「…

「・・・・・・

「出来ないなら、僕に仕える。二十億稼げるだけの状況を用意してやる

「・・・・・」

「じつん！ じつん！」

「働きます働きますう！ だから叩かないでえ！」

自棄になつて叫ぶ鈴蘭。それを見た貴瀬は何故か寂しげな表情を浮かべている。

「・・・ そ、うか。僕が君の立場だつたら、死んだ方がましだと思うのだが。仕方ない」

「もつじやあああつ！」



「これつて・・・ベンツですか？」

アパートから出た鈴蘭は田の前の高級外車を見てそう叫つた。

「ああ。なかなか言い車だらう？ 君も運転してみるか？」

「いや、私高校生なんで・・・免許持つてないんですけど」

「そ、うか。面白わうだな、運転しろ」

「だめだ。この人はどこかおかしい。大体、悪の組織を名乗つた時からそう思つていたのだ。この人はマトモじゃない、と。」

だがすでに貴瀬は沙穂と一緒に後部座席に座つてしまつてゐる。なので、仕方なく鈴蘭は運転席に座つた。

「いつなつたら自棄だ。たとえ事故を起こしたとしても、もう関係ない。そう思つて貴瀬の説明通りにエンジンをかける。

「エンジンはかかりましたけど・・・」

「では踏め」

そう言われて鈴蘭はためらいなくアクセルを踏んだ。知らぬがゆえに底付きするまで。

ドガソーナー

そして車は急加速し、すぐそことの交差点でパトカーに衝突する。

「あ、あ、あ、あのあの、ぶつ、ぶつけつ・・・パトパト・・・」

「くつくつ・・・ふははつ、パトパトか。君は愉快だなあ、鈴蘭。ほら早くアクセルを踏め。きみもまだ捕まりたくないだろ?」

そう言つて貴瀬は鈴蘭をせかす。

じつして始まつた警察との鬼ごつこは、ベンツがぼけぼけになり、鈴蘭が公安に田をつけられるまで続いた。

悪との契約（後書き）

次回ようやく主人公が主役に・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7663u/>

お・り・が・み 虹色の伝え手

2011年9月13日19時52分発行